



これは、もう二十数年も前のお話です。

今もいつこうになくなる気配のない不登校児。

この頃も同様でした。相談を受ける数ばかり

増えて、結局はどうにもならない、

そんな繰り返しが、現場では

起きていました。何とかしたい、

その思いで企画実行したのが

琵琶湖一周サイクリングでした。

二十年やそこらで人間が

変化するはずありません

ここで見つけられたことが

今もなお、有効であろうと

私は信じています。

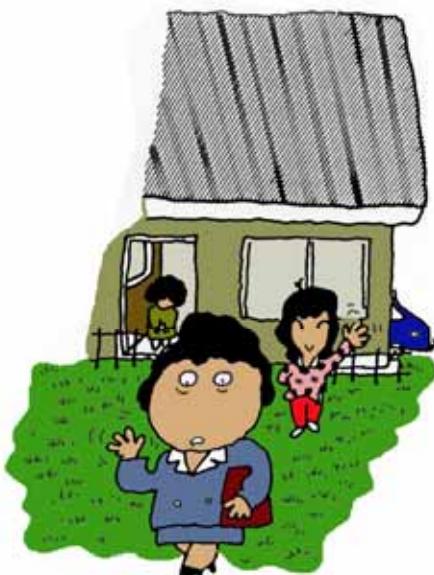
もつとも、児童相談所が不登校を扱うことは
すっかりなくなりました。そういう様変わりは
世の中のあちこちで顕著に見られます。



今日もまた会えなかつた。
もう五回目の家庭訪問だ。
まだ彼の顔を
見たことがない。
不登校になつてもう
八ヶ月になる。



この子も休み始めて
半年以上。
訪問するといつも、
にこやかに対応してくれるのに、
登校はできない。



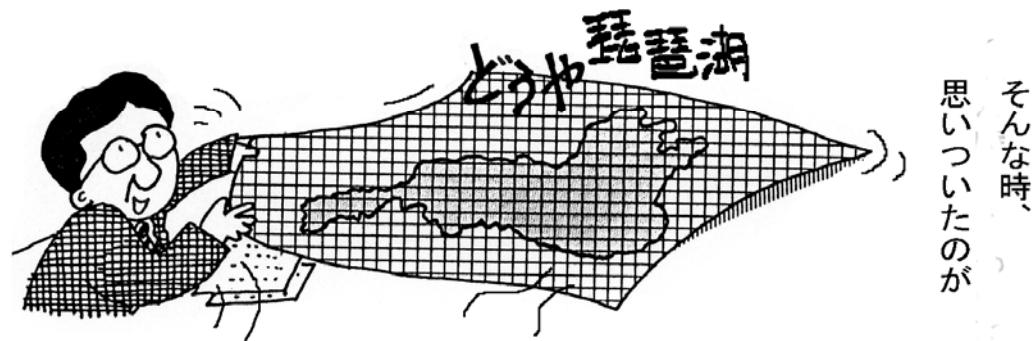
心理テストをして診断をし、
児童福祉司の社会診断と
合わせて処遇方針を決める。



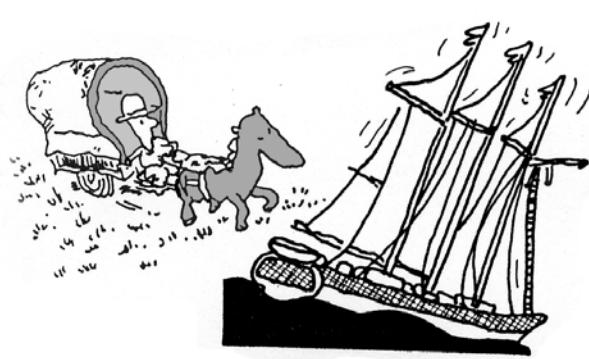
不登校だらけだったと言つても過言ではない。
なかなか解決しないのだから
溜まってゆくのである。



何とかしてやりたい気持ちはあったが、
方法がわからなかつた。



外国の実践に、長い旅を
取り入れたものがあるらしい。
本で見たんだけど、
幌馬車でアメリカ大陸横断とか、
帆船で航海とか。



ああだこうだの会議の末、
計画実行の許可が出た。

そこで不登校状況にある

男女中学生たちを、「琵琶湖

一周サイクリングに行こう」と

誘つた。普段は家に

閉じこもっている子たちだから

NO! という子が多い。



会いに行って、話して
10人ほどのOKを
とつた。

泳ぎもさせたい、

キャンプファイアーも、

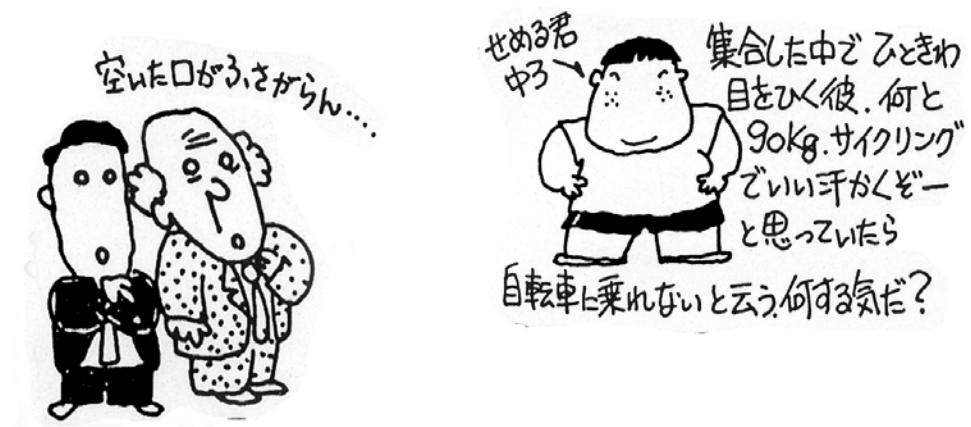
カラオケ、ボート乗りも

言えば言うほど準備は

大変になつた。



そして当日の連れだし、
これがなかなか大変だった。
本人だけではない、
家族が動搖したのである。





挿った者で夕飯の買い物にいつて、カレーを作った。
 まだ来ていない子が数人。

こんな子もいれば…



こんな母子も
いる。

ア～無理なことさせ
じめんぬ～ママ考えたのよ
ここからの帰り道に
ネッネット帰らましょ一緒に
さびしかったごは
ん

限られたチャンスを
寂しさとか、不安を
理由に、簡単に
放棄してしまう。
後から考えると、
あの時しかなかつたのに。

ガッカリの担当児童福祉司



とにかく、
そんなこんなで
出発前夜は
更けてゆくので
ある

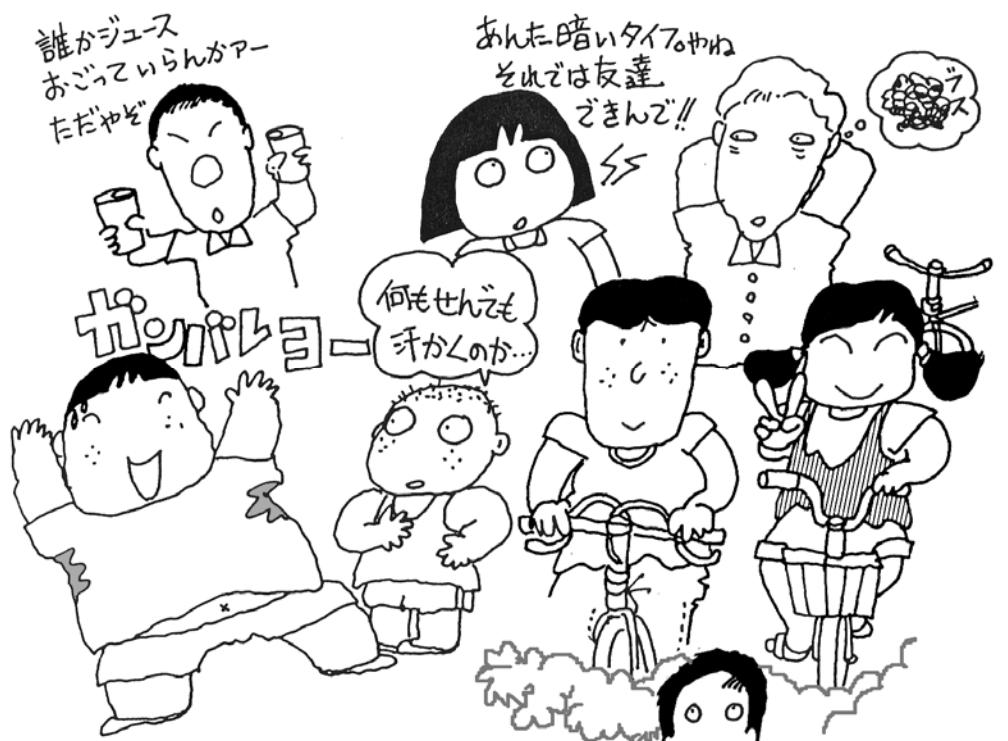


そして朝。



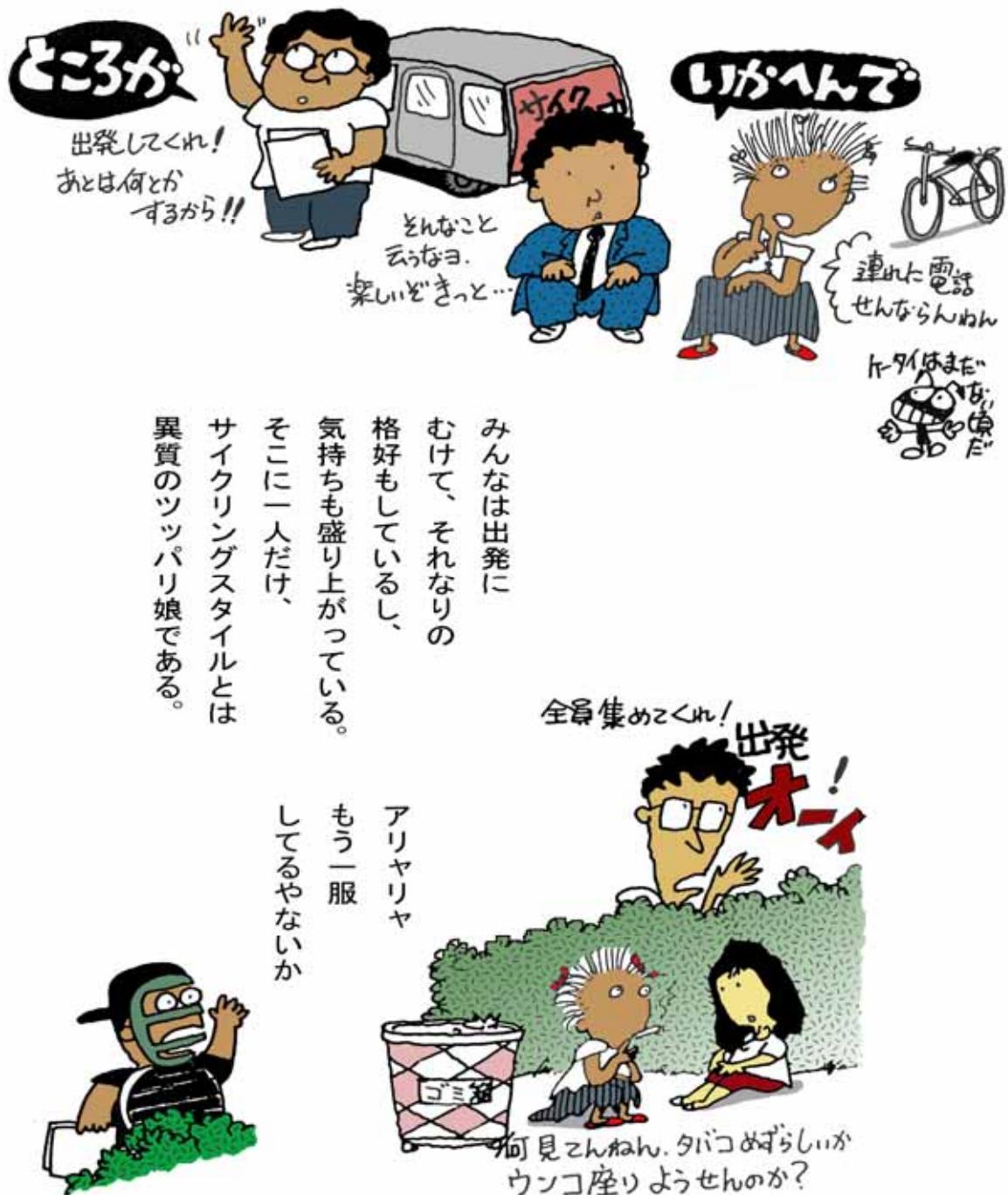
こういった事業を継続して
おこないたいと考えているなら
安全対策は不可欠である。
一度の事故で、何もかもが
だめになってしまふ例が
少くない。





おそらく来ないだろと踏んでいた子が
やつてきた。不登校児ではない。担当者が
是非と押し込んできた非行少女である。





隊列は男女差、体力差を考えて組んだ。

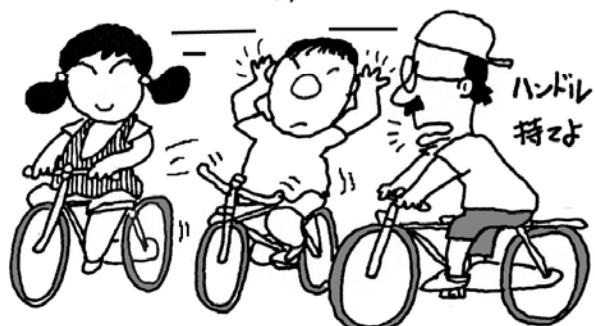
しばらく走ると慣れてきて
女の子はペチャクチャやりはじめる



スピードはゆっくり時速12kmくらいだ。

サイクリングの利点は
なんだかんだ言いながらも
結局はみんなついてくる
ことだ。

競争じゃないのに先の自転車を
追い越そうとする子がいる逆に
ドンドン間隔のあいこてしまう子そりゃ。

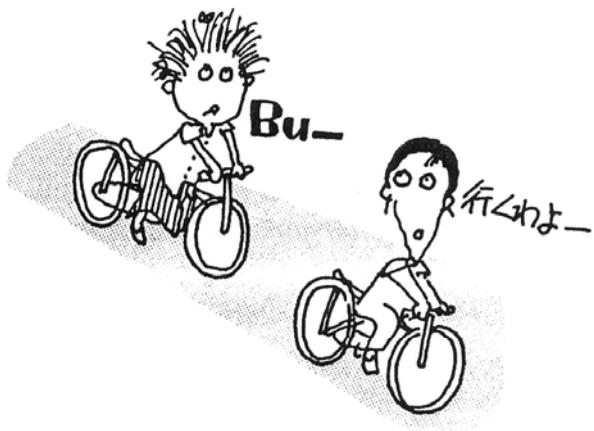


先頭は道をまちがえないよう
走る、後をどりなどと云うと皆で
ブーブーうるさい
からだ。



その場に居座つたまま、
動かなかつたなんて子には
会つたことがない。
遅れても、文句たらたら
言つてもペダルを
こいでくれる。
これは助かる。

ブツブツ言いながら走り出してみたものの、すぐに「のあります。

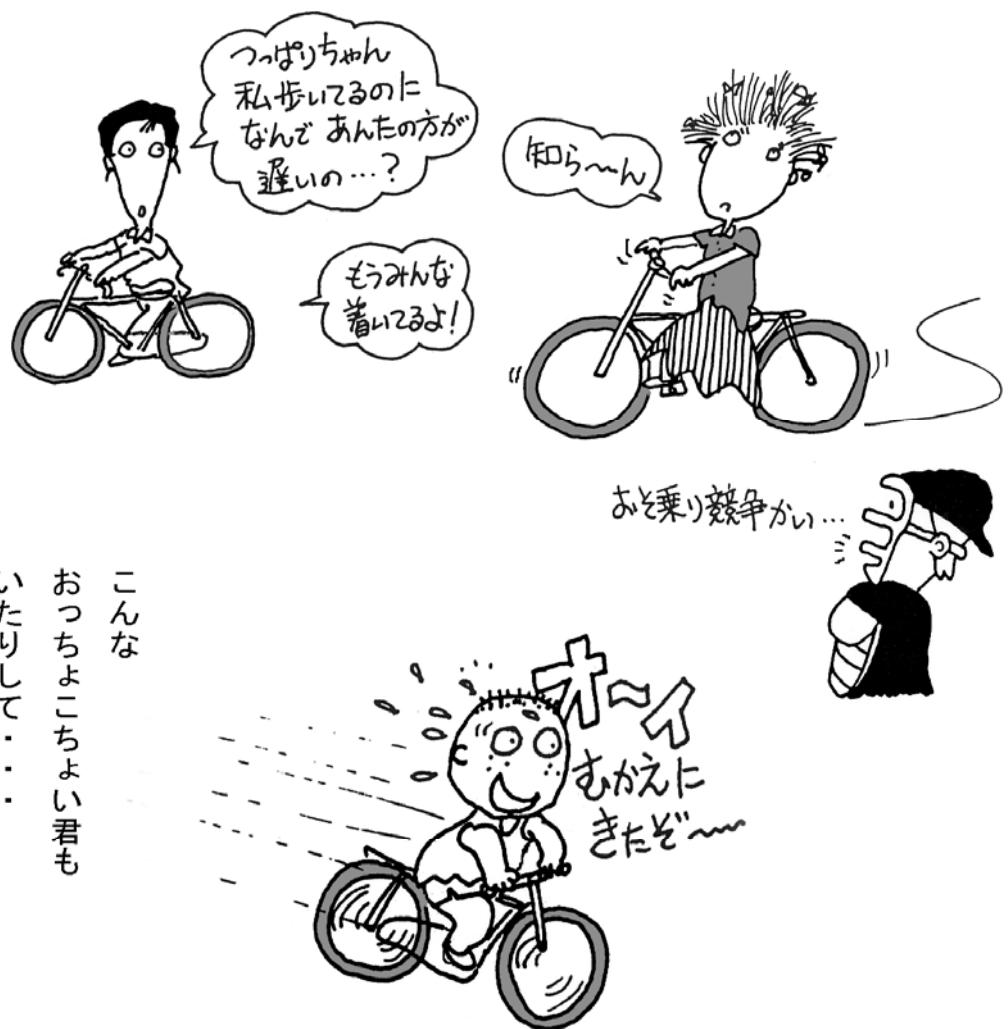


「車に乗せて」、「先に帰らせて」と勝手なことばかり。それでも規則は出来るだけ口にしないようにした。



ルールのことはずっと考えてきた。そして極力少なくすることに決めた。何か起きたら、そこで考えればいいと思つた。学校にはルールが多すぎる。





出発早々から大変やなあと
思っていた。
しかしこんなものは大変でも
何でもないことだった。
苦労やトラブルは
実はまだ始まつていなかつた。



一泊目のK寺Y.H.に
着くとすぐ私は研修を
受けるために京都に
ひきかえした。
スタッフと子どもたちは
入浴・夕食のあと
自由にすごすことになっていた。



午後11時すぎに
Y.H.にとどると
ヒゲが玄関先で
待つていた。

私がMさんと
担当しているケースの
ことで電話があって、
まだ出会いはじめた
ばかりの乙女の母親が
自殺したと云う



今夜がお通夜でMさんが
行ったという連絡だった。





言い過ぎたかな
と思つたが、
私も
サイクリング
初日と研修、
それに
BAD NEWS の
三重奏に
かなり
へばつていた。



この夜におこったトラブルは
実はこれだけではなかった…



同じ夜 Y.H. と泊まっていた高校生のグループに
女の子たちから声をかけて、花火をしに出て行って
しまったと云うのだ。



私も一緒に行ってもいい?





一緒にサイクリングをする子ども達それぞれは、みんな異なる事情を抱えていた。お互いがそれを何となく承知しながら、その話を切り出すのはためらっていた。私たちもそれを強いるようなつもりはなかつた。



父と母、それに妹(中1)と弟(小3)の
あわせて5人家族です。父は
学校の先生をしています。
母は主婦です。



父の知人の紹介で中1の頃から
カウンセリングを受けていました。
どこも気のあう
先生が何でも
話せました。

でも中3になって
進路のことを考えると
このままでどうなるんだ?う…って
あせりが出てきていたのです。

5年生の2学期に
すごくいやな
ことがあって…



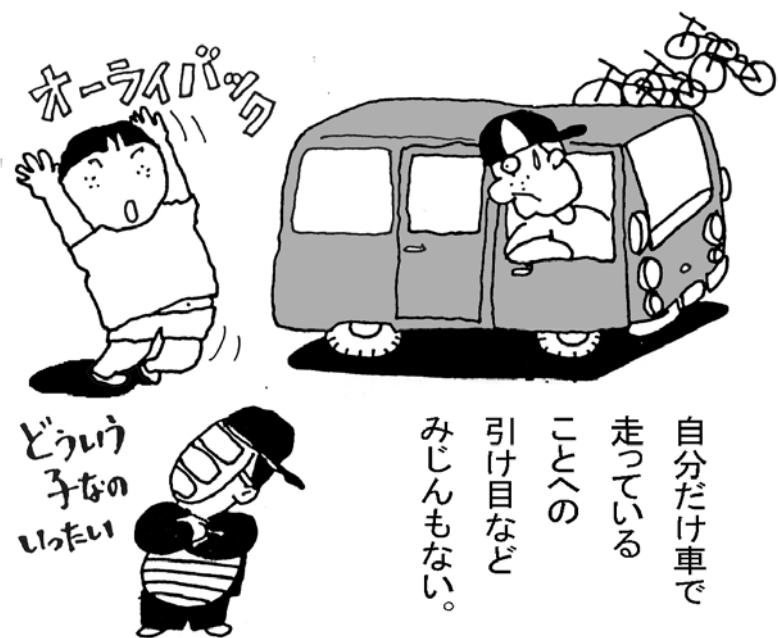
よくまあこれだけ、
いろんなことを考える
ものだと感心するくらいの
不安をとにかく聞いた。



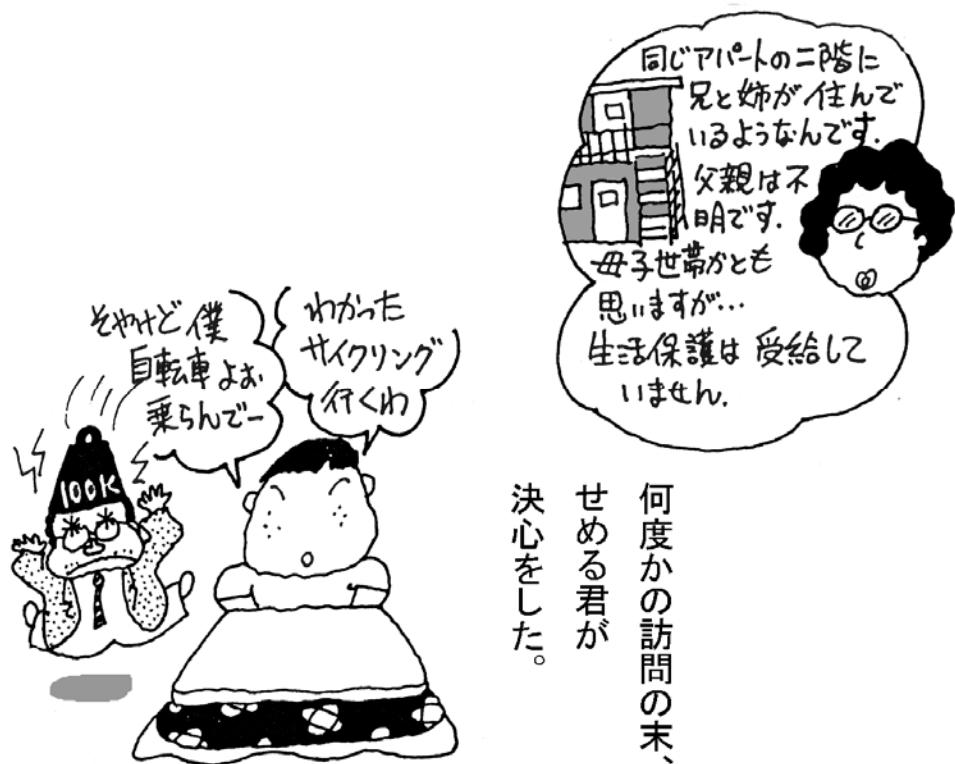
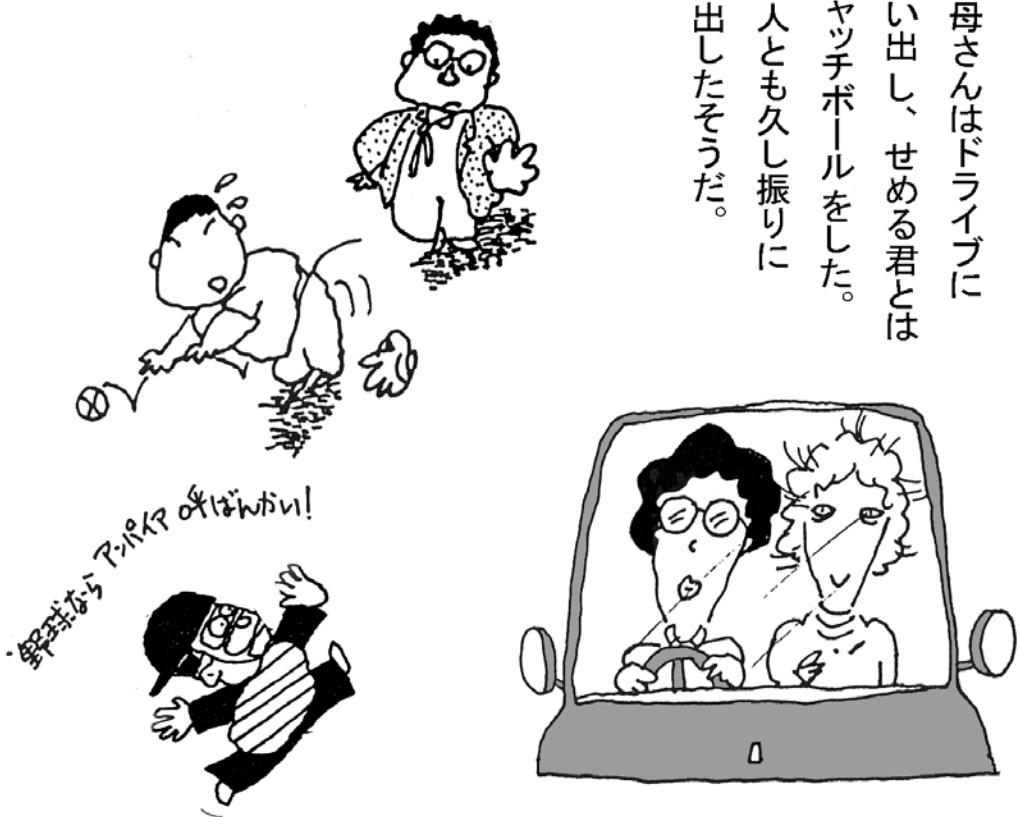
そこで、話は具体的に
進めてもらうこととした。
第一歩は家にこもっている
彼女をサイクリングに
参加するよう説得して貰うのだ。
夏休み中のことだから、
ダメで元々。



ところで、自転車に乗れない「せめる君」。車の助手席でどうしていたかといふと、意外なほど皆に馴染んでいた。



お母さんはドライブに
誘い出し、せめる君とは
キヤツチボールをした。
二人とも久し振りに
外出したそうだ。



何度も訪問の末、
せめる君が
決心した。



疾走するみんなを、せめる君は
いつもジーツと見ていた。
ビデオカメラの横で、道端で、
走り抜けてゆく自転車を
ほんとうに食い入るように
見つめていた。



そしてある日の昼休み。
みんなが休憩している間、
空いていた自転車に
またがって、フラフラとロロロ
練習を始めたのだ。



中学三年のカツコマン

たびたびみんなから離れて
一人になった。



この旅で面白かった」との一つが、人物評の男女差だった。なんとなく私は、誰がキレイだと、好みだとかは、男の子達が言うものだと思っていた。しかしそれは全く逆だった。

女の子はその話題に盛り上がり、男の子は皆無だった。



どんな経過の子だったっけ?



離婚して今は母子家庭
だって聞いたけど...
何して食べてはるんか...



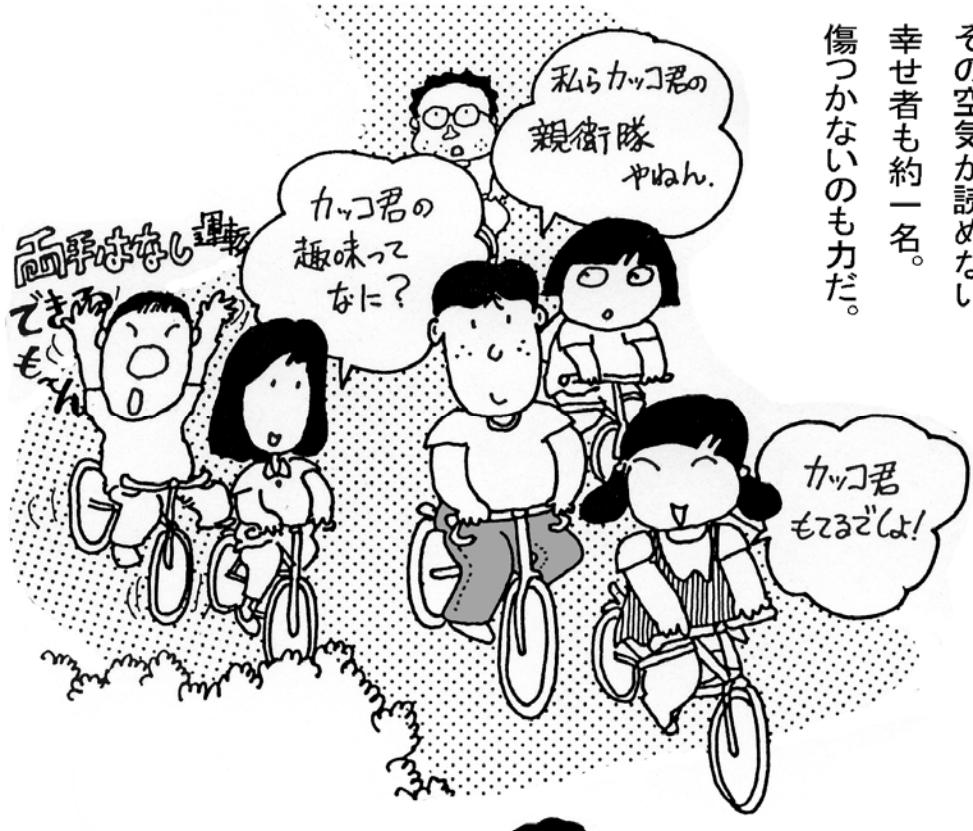
秘密が多くて、よく
分からんって、担当者が
ぼやいてましたよ。



彼の周囲には自然に女の子が集まる。
その空気が読めない、

幸せ者も約一名。

傷つかないのも力だ。



不合理な
現実だけ…

もろ子は
得されぬ



学校に行つていれば、
たとえ片思いでも
誰かに胸ときめかせていて
いい年頃だ。

しかし家に閉じこもって
いてはなかなか

そんな機会はない。
自分じゃなくても、
身近なところに
心ときめかせる友人がいて
それを応援してやる
そんな場も機会も
ない。

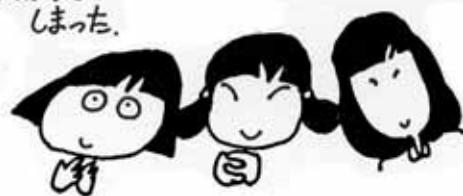


ランボー君、校内では力に
ものを言わせて振る舞うので、
周りから除け者にされていた。
少々了解の良くないところがあつて
誤解も多く友達がない。
それで学校も休んだりしていた。
お母さんは彼のことをよく
理解している穏やかな
優しい人だった。

ツツ・パリ娘に
一日惚れした。

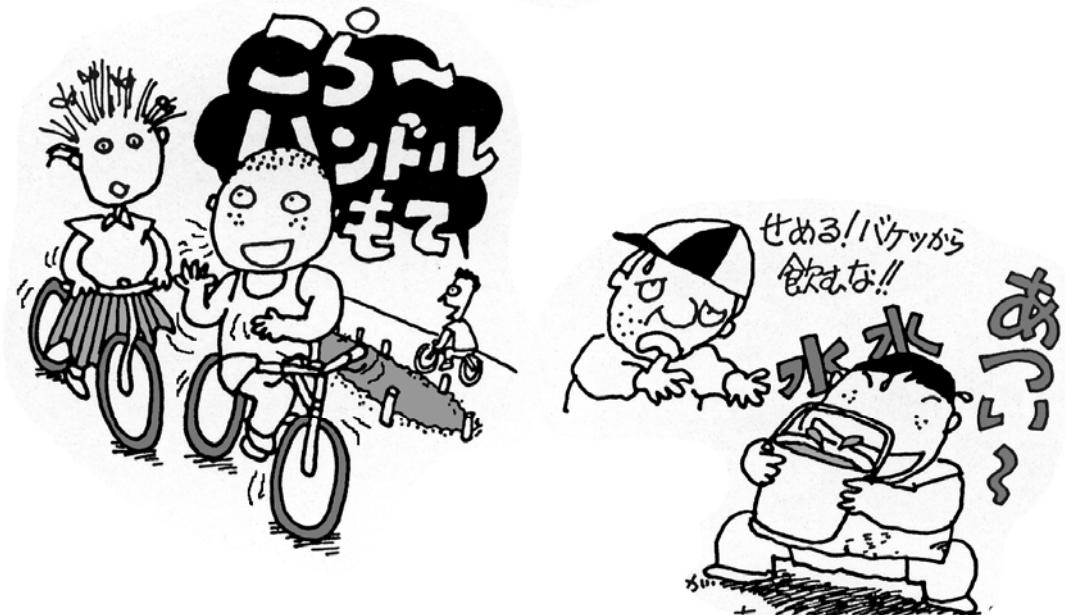
みんなにスク
わがって
しまった。

すなおな子だから



日中の一番暑い
時間帯は自転車を
とめて、昼寝したり
水辺で遊んだりした。





ランボー君とツッパリ娘のことが
きっかけで、女の子グループで
固まっていたところに男の子が
入って話すようになつていつた。

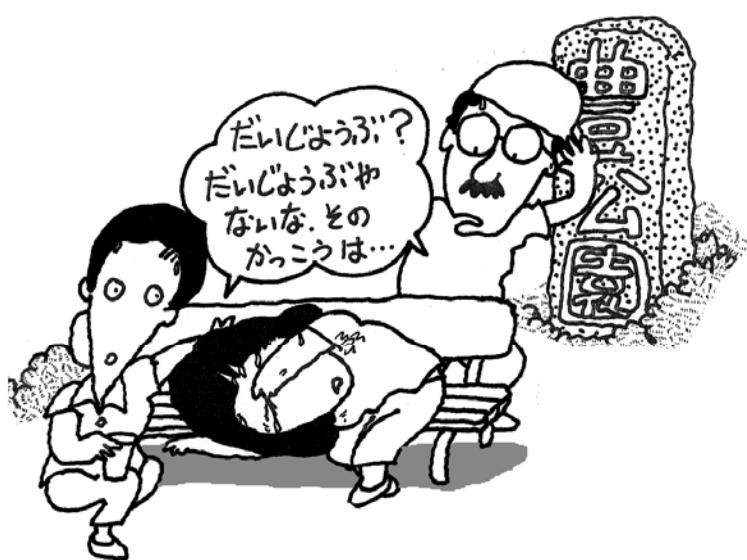


それぞれの心の奥に、いろいろな思いを秘めながら
サイクリングは



古田章子がギヴァップしてしまった。

苦しそうにベンチに伏せつたまま
何も食べない。今日の行程を考えて
スタッフは焦った。



ところが他の子達がみんな
「待つてやろうよ」と言った。
そこで、彼女がよくなるまで、
みんなで昼寝する事になった。





出発は午後4時過ぎになつた。
夏とはいっても夕方も
近くなると影が長い



資料によると、彼の父親は
普段は山奥の工房に行っていて
家には居ないという。

大人しい男子の中でも
特に印象がはつきり
してこないのが
二代目だった。



母親は口うるさい人で
学校のことも気にして
いる。しかしほとんど
無視される状態で
関心は弟の方に
向きつつある。

ワシのあとを
継いだらよいがな。
職人に中学の
勉強なんか
いらん!



彼の不登校はかなり長い。
三年生だが、全中学校
生活を合わせても、
出席は一学期分にも
ならないだろう。

父親のそんな声もあって
どうにもならない状態だと
学校もお手上げ気味だった。



グループの中で
猫背氣味で口数もなく
目立たない二代目だった。
スタッフも子ども達も
彼のことは気にとめていなかった。
ただ一人、持ち込んできた
車体だけが輝いていた。

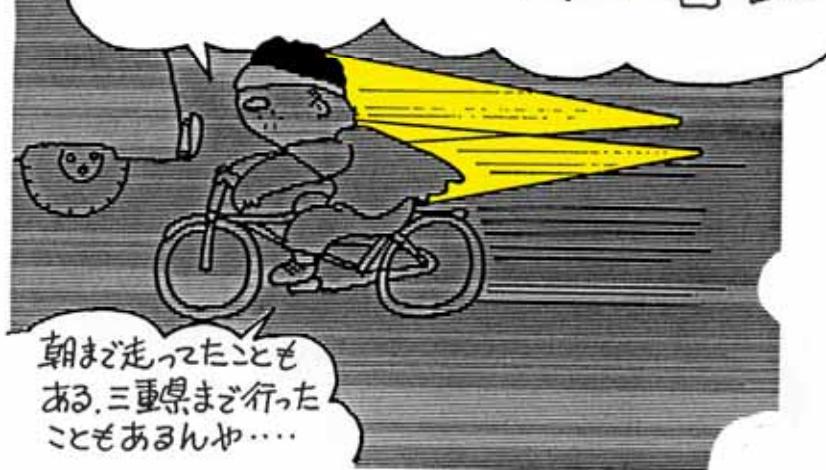


しかしサイクリングが本格化するに
従つて、姿がはつきりしてきた。
先頭を走るSasa先生の有能な
アシスタントになつていつたのだ。
ややもすると長くなつてしまふ隊列の
先頭と最後尾の間を何度も、行きつ戻りつ
した。疲労を感じ始めていた私たちは
その体力に
驚いた。

そしてある夜、焚き火の
側で聞いた話は、ちょっと
哀しいものだった。



お父が帰ってきた夜は、つい母さんとケンカになるんや。酒飲んでコップを投げることもある。
どういふ時、俺、自転車で外に出るねん。



こうして二代目は、のっぽ先生の助手として、才能を発揮はじめた。そしてグループの中での自分のポジションも築いていった。



琵琶湖北端の
駿ヶ岳ユースホステル、ここが主人公になってしまったのが憂一。

これまでの行程中 どうしごと仲間にになりきれない。
起きた事件のことはあとで描くとしてまずは彼自身のことから……



センセ
この人こんな
ことしますヨ

先生あんな
こと許されん
んですか!

せんせえ
せんせえ
せんせえ

お前が
せえ



憂一の母親とは私がずっと
出会っていた。 (下) につづく